Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-28

子宮内胎児発育遅延とレニン・アンジオテンシン系遺伝子多型の関連

藤岡, 一路 ; 森岡, 一朗 ; 香田, 翼 ; 松尾, 希世美 ; 横田, 知之 ; 森川, 悟 ; 三輪, 明弘 ; 柴田, 暁男 ; 横山, 直樹 ; 飯島, 一誠 ; 横山, 直樹 ;…

(Citation)
日本周産期・新生児医学会雑誌,48(2):368-368

(Issue Date)
2012-06-20

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(Rights)
right:日本周産期・新生児医学会

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001761

KOBE UNIVERSITY

O-087 子宮内胎児発育遅延とレニン・アンジオテンシン系遺伝子多型の関連

[1] 神戸大学大学院医学研究科内科系講座小児科学分野,
[2] 神戸大学医学部附属病院周産母子センター

藤岡一路[1,2], 森岡一朗[1,2], 香田 翼[1], 松尾希世美[1],
横田知之[1], 森川 悟[1], 三輪明弘[1], 柴田暁男[1],
横山直樹[1,2], 山田秀人[2], 飯島一誠[1]

【背景】 近年, 低出生体重児は成人期の冠動脈疾患（CAD）リスクが高いことが明らかとなっている. CADの発症のリスク因子としてレニン・アンジオテンシン系（RAS）遺伝子多型の関連は広く知られ, 注目されている. しかし, 低出生体重児の代表的病態である子宮内胎児発育遅延（IUGR）とRAS遺伝子多型の関連について検討された報告は少ない.
【対象・方法】 出生体重が在胎週数平均より-1.5SDを下回った児92例（中央値：在胎32週, 出生体重1,174g）をIUGR群, 在胎週数相当の児101例（31週, 1,670g）を対照群とした. 奇形症候群・染色体異常は除外した. これら二群間において, RAS遺伝子多型を周産期背景因子と共に比較検討した. 遺伝子解析は倫理委員会の承認のもと, 児の臍帯・臍帯血・頬粘膜からDNAを抽出し, ACE rs4340（I/D), AGT rs699（C＞T), AGTR1 rs5186（A＞C）をPCR法・RFLP法・直接シークエンス法を用いて決定した.
【結果】 周産期背景因子については, 妊娠高血圧症がIUGR群で有意に高かった. RAS遺伝子多型の変異Allele頻度は,ACE rs4340（IUGR群：32.6%, 対照群：33.7%), AGT rs699（19.0%, 19.3%), AGTR1 rs5186（8.2%, 6.9%）で二群間に有意な差はなかった. Genotype頻度では, ACE rs4340, AGTR1 rs5186で二群間に有意差はなかったが, AGT rs699のTT genotypeがIUGR群で有意に高く（IUGR群：4.4%, 対照群：0%, $p = 0.03$), TT genotypeを有する児は全例IUGR児であった.
【結語】 RAS遺伝子の1つである AGT rs699のTT genotypeはIUGRの発症と関連がある可能性がある.